

平成 22 年 5 月 11 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520152

研究課題名（和文） 上田秋成の和文作品本文の生成と変容についての研究

研究課題名（英文） Study on "generation and the transformation" of the "Wabun" texts of UEDA Akinari

研究代表者

飯倉 洋一 (IIKURA YOICHI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40176037

研究成果の概要（和文）：秋成の和文作品について、その本文の生成と変容という観点から、精緻な分析を行い、新しい和文研究の方法を提示するとともに、秋成の和文作品の再評価を行った。とくに『文反古』と『春雨物語』について、詳細な考察を行った。

研究成果の概要（英文）：About "Wabun" works of UEDA Akinari, I performed detailed analysis from a point of view of "generation and transformation" of those text. And I showed new method of "Wabun" study and reevaluated the "Wabun" works of Akinari. About "Fumihogu" and "Harusame monogatari", I performed in particular detailed consideration.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：日本近世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：秋成・和文・生成・文反古・異文

1. 研究開始当初の背景

上田秋成の研究は『雨月物語』『春雨物語』を中心に進められてきた。しかし秋成の残した作品はそれ以外にも歴大に存在し、その中で最も多いのは和歌和文である。同時代的にも秋成が評価されたのは、和歌和文の名手であるということであった。しかるに、秋成の和文作品についての研究は非常に少ない。『春雨物語』を理解するうえでも、和文研究の観

点からのアプローチは効果的であると考えられたし、それまでに多少の考察を重ねていた『文反古』についても、和文的観点からの考察が重要であると感じていた。和文の分析によって、秋成文学の特質が明らかになると考え、本研究を志した。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、上田秋成の和文作品について、生成論的・表現論的に精緻な分析を行い、

秋成の和文作品の再評価を行おうとするものである。具体的な作品としては『藤篋冊子』所収の和文作品、『文反古』・『背振翁伝』・『駕央行』・『春雨梅花歌文卷（仮題）』・『麻知文草稿類（仮題）』所収本文などを対象とする。これらは秋成晩年の作品であり、それぞれ相互に密接な関係があるが、従来研究が手薄である。また上記作品の研究は必然的に秋成の全著述と関係するので、研究の対象は実際には広範にわたることになる。秋成の和文作品は、それぞれが色濃く影響しあい、引用されるという〈共振するテキスト〉という側面を見せている。これを実証的に示すには、以下の三つの方向からの研究が必要であろう。

① 第一に和文作品の本文生成の研究である。秋成の和文作品には複数の異文が存在することが珍しくない。それらの遺文の成立年次や書写形態を調査し、秋成の和文本文がいかにかに生成したかを考察する。また同一作品の異文ではなく、他の作品に同じ発想・表現の文章がみられる点も重要で、この点を十分調査する。

② 第二に和文作品の注釈的研究を行うことで、これによって秋成の試みた表現上の仕掛けや周到な構成を明らかにする。具体的には、刊本『文反古』の全文の注釈をめざす。

③ 第三に、秋成の和文作品は、秋成自身の体験に基づくものが多いため、従来は伝記資料として用いられることが少なくなかったが、一方で秋成は自在に虚構を織り交ぜて文章を綴る。そういう伝記的事実とそれがいかにかに虚構化されているかという問題について考察する。

(2) 本研究においては、できるだけ秋成自筆本・転写本を実見し、たとえば特定の人に贈られるために書かれたなど、その本文が書かれた状況、本文の料紙、筆跡、装丁なども考慮しながら、本文研究を行う。それによって従来看過されていた表現の工夫も明らかになる。このような問題意識から、秋成的表現の秘密や秋成和文の独自性を解明することが目的である。

3. 研究の方法

(1) 秋成の和文作品資料および関連資料の調査収集を行う。奈良県の天理大学附属天理

図書館、山形県酒田市の本間図書館、東京都の静嘉堂文庫、國学院大学図書館、谷川好一氏所蔵の関係知りようをそれぞれ調査する。

①天理大学附属天理図書館には、秋成の和文作品を多数所蔵するので、ひととおり閲覧しておきたい。2009年度には同図書館所蔵の秋成自筆資料が多数展示される「秋成展」も開かれるので、見学する。

② また『文反古』との関係の深い静嘉堂文庫所蔵の稿本『六帖詠草』は、綴じ目が深く、判読できない部分があるため、京都市新日吉神社所蔵の異本や龍谷大学附属図書館所蔵の異本を援用して解読する必要がある。

③ 谷川好一氏宅に多く所蔵される秋成の作品とくに『春雨梅花歌文卷』について考察する。谷川氏は秋成の晩年の眼科医で、秋成は治療の謝礼として、さまざまな歌文を贈呈しているが、それがまとめて遺されていることは非常に貴重である。これらの資料をデジタル画像として収集する。

④ その他、必要な秋成和文関係資料を収集する。

(2) 異文の存在するテキスト、『春雨物語』『麻知文草稿類（仮題）』『藤篋冊子』『文反古』『背振翁伝』の本文（正文と異文）の校訂を行い、生成と変容の様相を明らかにする。

また、それぞれのテキストと関係の深い、別のテキストとの比較を行う。

これらのテキストについて、写真を収集し、それぞれの本文を入力し、その異同を、生成と変容の観点から考える。ただし、秋成の場合、複数の異文を単純に推敲過程と考えることはできない。それぞれのテキストの成立背景を、識語や、紙質、筆勢などから考察し、写本と版本の関係についても考慮に入れる。

(3) 写本としての和文の特質について、『春雨物語』を例に考察する。

現在、『春雨物語』は、佐藤本、富岡本、文化五年本、天理冊子本、天理卷子本の五種があり、その成立については様々な議論がある。本文論のレベルから離れて一般的に考えるとき、『春雨物語』とは、ふたつある。ひとつは秋成がみずからの手で書き、限られた読者が鑑賞した『春雨物語』である。それはテキストであると同時に書（芸術）でもあるが完全な形では現存しない。もうひとつは『春雨物

語』を古典たらしめた藤岡作太郎校訂の『春雨物語』をはじめ、それを元に後に出現した異本本文をとりこんでゆき、読書界に提供されてきた様々な活字の『春雨物語』である。それは前者のモノとしての『春雨物語』から、書としての芸術性や、贈与性、稀観性などを差し引き、文学作品としてのみ、つまりテキストレベルに一元化した本文である。しかし、そこには、紙質、使用した筆や墨の痕跡、筆勢、字の大小、濃淡、散らし書き、巻物としての鑑賞法、仮名字母、改行箇所など、さまざまな鑑賞すべき要素が失われている。本研究では『春雨物語』のテキストレベル以外の要素、すなわち書芸術としての側面をも含んだ『春雨物語』の読み方（あるいは鑑賞の仕方）でのアプローチを試みる。

4. 研究成果

(1) 寛政期以降の秋成の和文作品およびその周辺の関連資料の調査および収集を行った。

①谷川好一氏所蔵の秋成関係資料は、『春雨梅花歌文卷（仮題）』をはじめとして非常に貴重なものであり、本研究の重要な資料となるので、業者に依頼して全点をデジタルカメラで撮影・収集した。

②天理大学附属天理図書館の『文反古稿』および関連資料、東京都の静嘉堂文庫所蔵の『文反古』『六帖詠草』をはじめとする関連資料、大阪大学附属中之島図書館所蔵の『文反古』ほか関連資料、京都の新日吉神宮所蔵の「生い立ちの記」および『六帖詠草』・京都市の中野義雄所蔵の昇道自筆資料（秋成の和文を摘録している）・関西大学図書館の『文反古』ほか秋成和文資料またはその関連資料を調査閲覧した。

(2) 『文反古』の生成と変容をめぐる研究を行った。

①秋成の消息文八編を『藤簍冊子』の編者昇道が写した『秋成消息文集（仮題）』が、『文反古』所収の一部の消息文の草稿的内容を持ち、『文反古』の成立に深くかかわることを立証した。本資料は、従来秋成の文章ではなく、昇道の文章だと思われていた。しかし、調査によって、秋成の文章を昇道が書写したものであることがあきらかとなった。その結果、本書が、収められる4首の新出和歌とともに、

秋成新資料であることが判明し、そのことを日本近世文学会で発表した。

②天理大学附属天理図書館所蔵の『文反古稿』をふくむ草稿的な原稿から、刊本『文反古』が生成するあり方について、二本論文を執筆した。そのうちの一本は、テキストの変容にあり方を概観し、手紙という「閉じたテキスト」が消息文集という「開かれたテキスト」に変容することを具体的に考察した。またもう一本は、「秋山記」と『文反古』所収の消息の類似から、「秋山記」に引かれる女性の手紙が秋成の創作であることを指摘し、その上で、秋成の和文全体に、「めめしき」という基調があることを、『麻知文草稿類』なども用いて論じた。

③『文反古』の版下を書いたのが、従来言われているように昇道ではなく、松本柳斎であることが、柳斎自筆資料の検討によって明らかとなったので、「『文反古』の版下筆者」という論文でこれを報告した。

④本科研の報告書として刊本『文反古』注釈稿を作成・刊行した。本書はA4判2段組122頁におよぶもので、刊本『文反古』の本文、現代語訳、語注および、補注と題した考察からなる。補注では、天理図書館所蔵『文反古稿』や、『六帖詠草』ほか草稿的文章との異同を記した。本注釈稿は、『文反古』の基礎的研究であるとともに、秋成の伝記研究、和文研究に資するところが大きいものと自負している。

(3) 『春雨物語』の生成と変容をめぐる研究

①『春雨物語』は、従来テキストレベルの本文論によって、その生成が議論されてきたが、モノとしての和文作品という観点から、その議論の前提を再考する「『春雨物語』論の前提」という論文を発表した。すなわち、最大の問題となっている文化五年本と富岡本を、創作意図などの観点からのみ考察するのではなく、近世の写本に特有な問題を勘案すべきではないかとの異説を出した。

具体的には、成立時点で、秋成自筆本を読む場合に、テキストはどのような豊饒さをもつかということの考察である。このことを、稀観性、贈与性、芸術性という観点から考察した。そのような観点を導入した場合、諸本を時系列に並べようとするのは本文研究的に

あまり意味がないということ、また秋成の筆跡を味わうという前提で読んだ場合に、筆跡に言及する本文が、秋成を知る特定の者にしかわからない仕掛けになっていることなどを指摘した。

②秋成晩年の草稿投棄が『春雨物語』の形成に関わっていることを、秋成の「いつはり」意識の観点から考察し、「秋成における「いつはり」の問題—『春雨物語』を中心に」と題して研究発表および論文執筆を行った。

この考察では、『春雨物語』本文に「いつはり」ということばが非常に多く出てくることに注目し、それが序文の虚実論と関わって、秋成晩年の、執筆倫理感と関わるという仮説を提示した。

とくに文化五年本の「樊噲」末尾部分、樊噲頓悟の場面に出てくる「心さむく」の語は、秋成が文化四年にみずからの草稿を投棄した時に詠んだと思われる歌の第五句「心さむしも」に共通することを指摘し、このことから、「樊噲」に、草稿投棄の意識が反映していることを論じたものである。秋成の虚実観は晩年においては、倫理的色彩の強いものであったのではないかという問題提起も行うことになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 飯倉洋一、秋成における「いつはり」の問題—『春雨物語』を中心に—、日本研究、査読無、第13輯、高麗大学日本研究センター、2010、153—165
- ② 飯倉洋一、濫觴期絵本読本における公家・地下官人の序文、江戸文学、査読無、40号、2009、51—60
- ③ 飯倉洋一、未紹介〈秋成消息文集〉について、文学、査読無、第10巻第1号、2009、77—88
- ④ 飯倉洋一、『文反古』の版下筆者、上方文藝研究、査読有、第5号、2008、54—60
- ⑤ 飯倉洋一、『春雨物語』論の前提、国語と国文学、査読無、第85巻5号、2008、1—11

[学会発表] (計2件)

- ① 飯倉洋一、秋成における「いつはり」の問題—『春雨物語』を中心に、2009年度学術シンポジウム「日本近世文学・文芸の中心と周縁」、大韓民国高麗大学校、2009年9月18日
- ② 飯倉洋一、昇道筆秋成消息文集について、日本近世文学学会、佐賀大学、2007年11月11日

[図書] (計3件)

- ① 飯倉洋一、他、『日本のことばと文化—日本と中国の日本文化研究の接点—』、溪水社、2009、637
- ② 飯倉洋一、木越治、『秋成文学の生成』、森話社、2008、413

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯倉 洋一 (IIKURA YOICHI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40176037